特別寄稿

「この霧が晴れるまで」他4篇

～母親が詩に綴った「福島発、子どもたちの現在」～

大澤秋恵

お茶の水女子大学ECCELL[注1]では、二〇一二年二月十一日に第四回子ども学シンポジウムを開催しました。東日本大震災から十一か月を経たその日に、福島市の保育士さん、保護者の方（三人の男の子のお父さん）、研究者の大宮勇雄先生においでいただき、お話を伺いました。[注2]

三人の方々とのその後のやりとりの中で、シンポジウムでお話しくださった保護者のお連れ合いの大澤秋恵さんが、原発事故後、「表現せずにはおれない」思いで書かれた詩を、送ってくださいました。皆で受け止め、共有したいと思い、ここに掲載させていただくことにしました。（お茶の水女子大学ECCELL　菊地知子）

この霧が晴れるまで

見えない物が降ってきた
子らに笑顔でおやすみを言ってから
一人茶の間にうなだれる
ほんの一瞬の気のゆるみ
涙がふいにこみあげる
何という緊張の連続なのか
平常な自分を保とうと
みんな必死で生きている

手と手をつないで歩いて行こう

あの道も　この道も
ずっと歩いてきた道だから

どちらへ行けばこの霧が晴れるのか
まだ誰にも分からない
だから今は決してその手を離さないで
真っ黒い大きな雲の渦に
　　のみ込まれてしまいそうだから

手と手をつないで歩いて行こう
あの山も　この川も
また　きらきら輝く時がやってくる

ほんの少し気をつけることが増えただけさ
〝これは食べたらいけないよ〟って
教えてあげればいいのだから
あっちでも　こっちでも
誰もが測れるようにしてもらえば簡単さ

さあ　だから今は立ち止まらないよ

鉛のようなこの見えない霧に
　　押しつぶされてしまわぬように
つないだその手を離さないで

声に出して

喜びも哀しみも
楽しいことだってたくさんある
何も感じなかったら生きていたってつまらない
ならば「怒り」も忘れちゃダメさ

家族と離れて暮らす人
仲間の元を去りゆく人
不安を胸に働く人
なぜ　こんなにもめちゃくちゃになったのか

元気いっぱいの子どもらが
　　野っぱらを駆け回ることもできず
もっと小さな子らはどろんこいじりさえ許されない

ただ健やかでありたいという願いが
日々の食卓を悩ませる

一体全体　どういうことなの!?!
みんな本当に怒っている
どうすればいい？
ちっぽけな自分だけれど

心の声に
耳をすまして
そっと表に出してみる
どうすればいい？
この小さな叫び

あっちからも　こっちからも
みなの叫び声
みんな集まれ

〝未来を取り戻したい〟

のっぺらぼうのオバケ

桜の花も　見慣れた景色も
みんな灰色でモノトーン

一瞬、後ろを何かがよぎる
ここはどこだろう
或いは夢を見ているのか
どこか違っている
まるで光を失った　のっぺらぼうのオバケ

子らよ
君らの瞳には　どんな風に映っているのだろう
田んぼのあぜ道　ぶどうの畑
花をつんだり　虫を追いかけていた

その世界を
来る日も、来る日も、窓の内から
君らはいったい
どんな瞳で　見つめているのだろう

嗚呼　どうか届いていて欲しい
太陽の眩しさも　風のきらめきも
以前と何も変わらず
君らにだけは
この世界の　あざやかな色そのままに

のっぺらぼうのオバケなんて
母さん　もう　さよならしようかな
手をつないで　歌をうたって
そうして　また
たんぽぽをいっぱい見つけたら
一緒に　ふぅーって吹こう

ぼくらの五つ星

ダンプに　クレーン　ミキサー車
窓の向こうは大にぎわい
ぐるり囲んだ　その塀に
ぼくらの五つ星　光ってる

「原」「発」「N」「O」「！」

薄紅のぶどう畑を横切って
家路を急ぐ車から
向こうにそれが見えた時
幼い君が叫び出す

「原」「発」「N」「O」「！」
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）

「原」「発」「N」「O」「！」
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
げん・ぱつ・えぬ・おー・のー！（NO！）
声をはずませ
力の限り
いつまでも

君が　そう叫ぶ

花のサイン

たんぽぽを見つけては
　手のひらいっぱいに摘んでいたあなた
野花を持ち帰っては
　お家のコップに飾っていたあなた
大好きなあなたへ

もう花なんか踏んじゃうから

春の気配を感じたあの日の夜
吐き捨てるようにあなたは言った

背中を壁にぴったりとくっつけ
唇をかみ　じっと斜めに床を見つめている
あなたがどんなに嫌がってどんなにもがいても
あなたをただ強く抱きしめた

とったらダメって言うんでしょ！

ふりしぼるように小さな声で
あなたが今にも壊れちゃいそうだってこと
教えてくれて良かった

（福島市・保護者）

注

1　EarlyChildhood Care/Education & Lifelong Learning「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の略称で、平成22年度より6か年計画で推進される特別経費による教育研究プロジェクトです。乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探求する場の創造を目指しています。

2　子ども学シンポジウムでのお話をもとに再構成された鈴木直子さん、大澤由記さんの文が、『忘れない！明日へ共に　東日本大震災・原発事故と保育』（ひとなる書房）に収められています。併せお読みいただければ幸いです。